仏教論理の再確立

辻　村　繁　一

仏教あるいは禅を信仰あるいは史的形式に把握せず、人間の思想形成の論理としての特質は何かを論理形式に表現凝縮したときこそ仏教学は存在すると言える。

この表現を仏教の哲学的表現というなら、その根拠は論理たるべきであり、ここに仏教学は、仏教根拠の論理的把握にその課題を集中せなければ仏教学の意味は消失しよう。

仏教学は仏教哲学ではなく、その仏教哲学が現代の人間論理として如何なる位置を持つているかを確認するのであつて、そのことによつてその信仰と世界の存在価値を確認するのである。その時竜樹空観哲学を持つて仏教哲学とするなら、それは仏陀般若の論理は全く疎外せられ、般若と空観を混同するなら、論理的に把握せられる仏教は全く無価値なものとなるという事態を把握せずして仏教学は成立しない。西欧論理学が把握する三つの論理律㈠同一律、㈡矛盾律、㈢排中律に対して空観と般若はいかに対応するかである。

さて西欧論理学と仏教論理学の基本異質は前者が存在主体性論理たるに対して後者は意識主体性論理である。

従つてその各々の論理律が存在論的なものと意識論的なものであることは当然である。

ここに西欧哲学と空観哲学にその優劣真偽を比較することは全く無意味である。すなわちロゴス論理律としての同一律に対して即論理、矛盾律に対して即非論理はレンマ論理律となるからロゴス哲学とレンマ哲学に優劣真偽はない。

いうならば人間思考が存在的ロゴスであるとき、同一と矛盾が把握せられ、意識的レンマであるなら、即と即非が把握せられるという事態こそ今日迄の人間哲学の成果として成立しているとして妥当であろう。

ただ前者はギリシャ社会において、後者はインド社会において出発せられたが故に、それぞれは人間の自然環境支配のもとに成立したものと受け取つて差支えあるとは言えず、それゆえ、それを東洋と西洋の特色的なものとすることを拒否し得ない。だがそれは人間の存在主体性の思考によつてであ

るか、意識主体性の思考によつてであるかということの相対であつて、一方を西欧的なもの、他方を東洋的なものなどとすることこそ絶対に人間の錯覚であるという確認にこそ人間は今や新たなる哲学を必要としているのであり、この四つの論理原則の上に立つ哲学こそ人間の必要とする哲学であることの認識、その認識こそ仏陀によつてなされたことの価値こそ仏教の価値でなければならないのである。

同一と矛盾を原則とするか即と即非を原則とするかの比較対立などに、趣味偏向の価値しかないことを確認するための論理、その論理が仏教によつて確立せられたとき仏教は始めて仏陀を継承することが出来るのである。

このことは存在論的なものと意識論的なものの価値比較は人間論理においては無用無価値であるという認識に出発することであり、人間存在はそのまま人間意識として確認されるということ、存在することと意識することは全く逆転同一であり、存在が意識するのでも、意識が存在するのでもなく、ただ存在と意識は相対相応すると把握することの人間把握の根底を提供する仏教論理を構成することである。

西欧哲学的伝統とは存在は存在すると言うことに奇異を感じないのは仏教空観哲学によつて意識は意識するということに奇異を感じないのと同一効果をもたらすのみとする認識は存在と意識は全く相対状況の表現媒体であることを示し、そのことの論理的把握にこそ人間の哲学があることの意味把握が仏教発見の基礎である。

換言すれば存在と意識は共に時間と空間を対象する作用であることにおいては全く同一で対象する時間と空間が全く逆転分裂したものであり、その分裂は人間の生きる限り結合することはなく、

正に存在と意識は順逆的逆方向性にある。

存在は感覚であり、意識は知覚であると共に感覚は意識を分裂せしめ、知覚は存在を分裂するのであつて、感覚は二つの空間存在を、知覚は二つの時間意識を把握する。

過去と未来は存在的に同一であつても、意識的には矛盾であつて、同一性自己は存在的に把握する自己であり、矛盾性自己は意識的に把握した自己なのである。存在的には肯定を肯定すること、否定を否定することに同一があるが意識的には即非なのであり、存在的に肯定を否定すれば矛盾であるが、意識的には即なのである。存在分裂は過去と未来の時間と空間を象徴し、意識分裂は現在の時間と空間を象徴する。空観哲学は即非なる現在を前提して過去と未来の即を論理したものであり、ヘーゲルは矛盾する現在を前提して過去現象と未来本質を止揚したのであつて、前者は不生不滅の概念を後者は実存概念を弁証したことによつて、それはそれぞれ存在と意識に主体して構成した概念哲学として同一であり、弁

証法哲学として全く同一の哲学であつたのである。

すなわち意識と存在は一方の半回転によつて対立し、その一回転によつて相対するのである。同一は矛盾に対立し、その逆転は即である。即は即非に対立し、その逆転は同一である。

かくてヘーゲルの同一と非同一の同一とは意識即と存在矛盾の同一を言つているのであつて、このことは西欧と東洋の哲学的根拠を把握するならば、ヘーゲル弁証法の論理的成果など何もそのような哲学論理など必要とせない認識なのである。正に西洋と東洋はいづれも弁証法哲学を人間哲学だと考えていたのである。

そしてこの弁証法哲学、従つてその弁証法論理とは唯一つの排中律という論理原則への信仰を表現したものでしかなかつたのである。

空観哲学と称し、禅哲学と称し、カントヘーゲル哲学と称し、老荘哲学と称する、東洋と西洋を問わず人間哲学とはすべて排中律に統合される哲学でしかなかつたのである。

いうならば今日迄に人間に提供せられた哲学は同一を前提して矛盾を言うか、矛盾を前提して同一を言うか、即を前提して即非を言うか、言うならばAを前提してBを言うか、Bを前提してAを言うか、が東洋と西欧を通じての哲学であつた。

それらの哲学はAであるかBであるかの排中律によつて一括せられる哲学である。

このAとBは実は存在と意識であつたということを排中律人間は知らなかつたからである。そしてこのAとBはとうとう止揚せられて概念に昇華されて人間の哲学はそこで終止符を打つたということなのである。

だが豈計らんや人間はこのAとBのいづれもを持つて居り、それゆえ人間の排中律は「AもBも」でなければならないことによつてこの排中律哲学はすべて破産する運命を持つていたのである。だがこのような排中律哲学の破産を予言していたものが仏陀によつて表現せられて居り、それこそは仏陀の般若論理であつたということにこそ仏教哲学がある。

正に般若こそ排中律を否定し、弁証法論理を拒否する論理であり、それは決して即でも即非でもなかつたことの発見にこそ、仏教学は人類の頭上に輝く、仏陀未曾有の法を発見するだろう。それは弁証法哲学を否定する。

般若は人間の名を二つとし、

一つは時間と空間を持つ名であり、一つは時間と空間を持たない名なのである。前者は生きる実体形象の名であり、後者は死骸幽霊の名である。ヘーゲルが現象と本質が概念に止揚されると考えたのは錯覚であり、それは単なる抽象止揚にすぎず、その具象止揚象徴の存在を知らないのであり、正にヘーゲル概念は死体概念の名と生体象徴の名に分裂するのである。